

「消化管造影ベスト・テクニク」

筑波大学臨床医学系講師・放射線科 斎田 幸久
きぬ医師会病院・放射線科科長 角田 博子

聖路加国際病院顧問

野辺地 篤 郎

この本はもともと筑波大学医学部附属病院放射線科においてローテーションで来るレジデントのための教育用のマニュアルとして作られたものの由であるが、著者らが前書きで述べておられるように、消化管の造影手技を咽頭から直腸までについて記述してある、他に類例のない大変ユニークな本である。

消化管の診断に関する教科書はたくさんあるが、手技に限って書かれた本は放射線技師のためのものを除いてはこれまでなかったのではないかと思う。

たしかに近年の内視鏡の性能の向上と技術の発展普及は、X線検査以外に早期癌を発見する方法がなかった時代は遙かな過去のものであったという感を抱かせるものと言えよう。

この本は消化管検査の方法について、具体的に極めて詳しく、バリウムの飲ませ方から始まって、体位の変え方についてはどちらから回すのか、またその速さまで指示すると共に、呼吸の止めさせ方まで痒い所に手が届くように書かれている。しかも文章がとても読みやすく書かれているのがすばらしい。この本では随所に英語が極めて手軽に使われている

ることにもよるのだと思われる。特に注腸造影の章では解剖学的な部位名が全部英語になっているのは、驚くべき勇氣をもって読みやすい本にしたものと敬意を表するが、体位などは日本語でもよかったのではないかと思う。そうすれば70頁1行目のuprightとすべきところをuprightとしてしまうような間違いは起こらなかった筈である。

この本はアンダーチューブ遠隔操作による検査の方法について記述されているのであるが、2頁でスポット撮影装置とイメージインテンシファイアーの部分で天板と言っているのは正しくない。天板とは患者がよりかかったり寝たりする透視台の上の板を言うので、ここは受像部あるいは狙撃撮影部とでも言わなければならないまい。また3頁で「食道の2方向撮影は同じ高さで撮影する方が美的であり、読影の時にも楽である」とあるのは、読影の際にわずかな異常を見出した際に極めて有用であるので、「美的」という表現は不要であろう。検査の際のX線量を少なくするための注意が随所にあることは極めて適切で、さすがに斎田先生の記述だと言えよう。

近年多くの画像診断法が使われる

ようになって、その発達進歩はめざましいが、それは機器の進歩によるものが大きい。そのために、ややもすると消化管の造影検査のフィルムも、誰が検査しても間違いなく必要な診断情報を提供してくれると考えられる心配があるのであるが、この本はこの検査によって得られる情報の質の向上のため、特に最低レベルを上げるのに役立つものと言えよう。

4か所にわかれて消化管造影の10原則なるものが書かれていて、これらは検査をするときに心掛けるべき原則的な注意事項であるが、その10番目は「いいかげんな検査なら最初からやらない方がよい」であって、これは極めて適切というか皮肉な言い方であるが、最も大切な原則と言えよう。

「いいかげんな検査」をしないためにも、本書は初心者にとって大変有用であるのみならず、かなりの経験を積んだ方々も全部に目を通すと、必ず役に立つところがあるはずである。

●A5判 116頁 図43 写真59
1991 定価4,944円(税込) 円300

医学書院 刊(☎03-3817-5657)